

が登れる。右岸高捲きすれば今は全く使われていない踏跡に出る。ここを過ぎると沢幅も広がり単純な河原となる。途中高さ五呎長さ一〇呎位のナメ滝があるが、それを越えると幅こそ狭くなるがまた変化のない沢が続く。昨年のわらじのためかボロボロになったが、たいして大きな滝もないのでそのままミズナ・フキを採りながら登る。左から小沢が入っていたので、「つまらない沢だから左に逃げて尾根に」と思いそっちに入り小滝を越えたら水が涸れブッシュとなる。「これは大変」とまた元に戻る。今度はスケールこそ小さいが小滝が続き快適な沢登りとなる。二呎、一五呎の二段の滝がかかっている。右沢の方が水量が多いが左沢の滝も見事である。上の方まで見えないが少なくとも二〇呎もある。右沢は一〇呎、その上に七〇呎の滝が雄大に落ち、その中間に六〇呎の滝が合流。この沢の核心部といえる。最初の一〇呎の左岸を捲き六〇呎の滝の下流を渡って七〇呎滝左岸の小尾根に入る。立木が多くホールドが充分。この上流は水量も少なく、大きな滝はないがかなりの勾配である。右岸のきれいなスラブ滝を過ぎると涸れ沢となる。しかしその上流の六呎滝にはやや流れがある。おそらく二枚沢(伏

流)となつてゐるのだろう。この辺からアブがうるさい。やがてまた沢は二つにわかれる。右の方へ入るがすぐヤブとなり一時間二〇分で天元台スキ場第三リフト終点に出る。(記・)

(タイム)

出合七・一五―二俣八・二〇―奥の二俣一二・一〇―  
最終滝一三・一五―第三リフト終点一四・三五

### 三代道沢左俣左沢

一九七九年七月十日

◆天気(快晴)

西吾妻スカイバレーに入る手前、三代道沢と湯ノ入沢の合流する所に橋がある。そこに車を置いて遡行を開始する。いくつか小滝をすぎ三〇分程進むと沢が「S字状」になる。その先に八呎、五呎と滝が現われ、のちに二俣となる。私達は小休止後左俣に入る。すぐ四〇呎程の滝がいくらかナメ状になって目の前に現われる。岩がすべるので右岸のブッシュを利用して捲く。その後一五分ほど沢は再びわかれ、私達は左沢に入る。水量は二・一



て 沢 道 代 三

で右沢の方が多い。

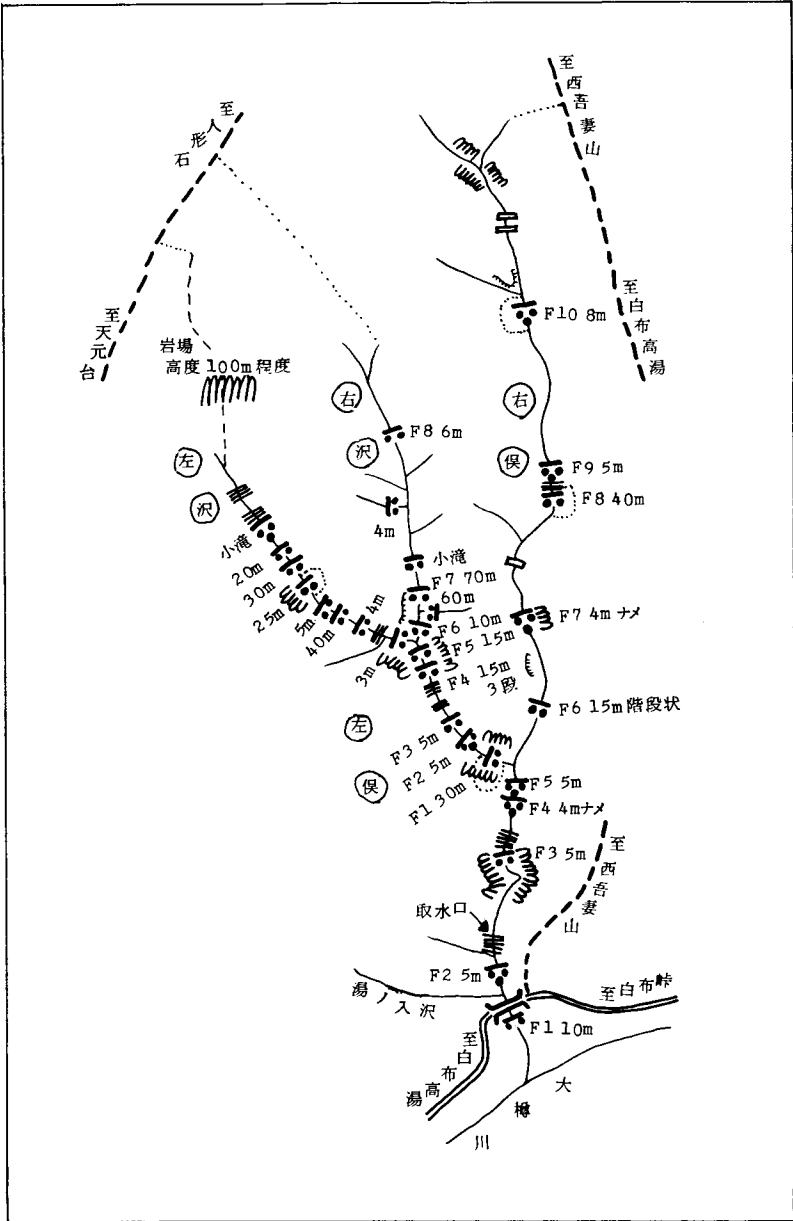
左沢に入つて三〇分程は何も無い。次に二段にはなつてゐるが四〇分程の滝が出てくる。核心部はここからで、大きな滝が連続する。左沢に入つてから五つめの二五分程の滝で手こずり、最終的には左岸の捲きをしいられる。

懸垂下降ですぐ沢におりて昼食。次に三〇分、二〇分と続くが、階段状になつてゐるので登りやすい。ここをすぎると滝らしい滝はなくなり、沢にはヤブがかぶさつて水がかれてしまふ。途中沢がわかれ、右のカレ沢に入り一〇分程進むと岩場におつかる。雨が降れば滝になるのだろう。簡単に登れる。一〇〇分程の高度をいっぺんにかせいでしまうと、カレ沢はだんだん平坦になつて、ヤブがかぶさつてくる。沢の途中から左に入るとすぐスキー場にとび出す。廻行終了、下山にかかる。

(記)

(タイム)

出合九…二五—二俣一〇…一五—右沢分岐一〇…四〇  
—岩場一三…〇五—スキー場一四…一〇



三代道沢 (作図：村 泉 )